

第 122 回研究会

「コロナ禍の経験で変わる事、変わらない事／大学のニューノーマルとは？」

坪内健、北海道大学

開催概要

企画：建築社会研究委員会

日時：2021 年 9 月 11 日（土）14：30～17：30

会場：Zoom（参加：20 名）

1）主旨説明 森傑（北海道大学）

コロナ禍に伴うニューノーマルがポジティブな社会変化を促すことを期待しているものの、収束後に定着するのか懐疑的に思うところがある。コロナ禍の各大学での経験や学びの環境変化を広く共有したい。

2）話題提供

① コロナ禍と大学の対応、その推移

岡田哲弥（シドニー大学）

2020 年 3 月中旬に国境封鎖が行われ、現在も続いている。都市封鎖も行われ、大学のキャンパスは第 1 次(2020 年 12 月～2021 年 1 月)の際は行くことができたものの、第 2 次(2021 年 7 月～)の際は完全に行くことができなくなっている。講義のオンライン化は、封鎖を契機に一気に進められ、今年の一学期は対面のものも多少あったが、二学期からは完全にオンラインへと移行した。オンライン講義は対面とは異なり学生の学習姿勢が把握しにくい側面があり、オンラインへの移行自体をどのように受容されているか不明瞭なところがある。試験も自身の大学では AI を活用したオンライン監督プログラムを導入している。また、オーストラリアは教育産業が盛んで、全体の 3 割～4 割ほどいる留学生のほとんどが母国に帰国したため財政的なダメージが大きく、大学職員の希望退職の募集も始まっている。国はワクチン摂取率が高まれば国境や都市の封鎖を段階的に解除する意向を示しているものの、不確定な状況が続く予測が難しい。対面での講義よりもオンラインを好む学生も出てくることが予想され、今後は両者がハイブリッドされていくように考えている。オンライン講義の質を向上するためには、各教員のオンラインツールの導入や活用の積極性が不可欠で、デジタルリテラシーが求められるように考えている。

② コロナ禍における大学日本語教育：台湾中部の私立大学における事例 松永稔也（台湾東海大学）

台湾では、迅速な国家のコロナ対応が功を奏し、マス

クをしていればこれまでと変わらない生活を送ることができていたが、2021 年 5 月中旬の感染者急増により全教育機関で通学禁止となり授業のオンライン化が進められた。語学教育におけるオンライン講義の難しさはダイアログで、講義で学んだ表現を実際の会話で使用してみるような実践ができず、モノログに頼らざるを得ない点にもどかしさを感じる。一方、対面とオンラインでは輝く学生が異なり、今後の学習では両者を組み合わせていく必要があると気付くことができた。オンライン講義に移行して学生の出席率が増えたのが印象的で、これまで通学が億劫な学生が一定数いたことを実感した。また、コロナ禍以前に行われていた対面や実地での体験が前提となるフィールドワークやスタディツアーなどの交流活動は行われておらず、身体性や学びのプロセスを重視した学習がなくなってしまうことを危惧している。台湾では市民と政府の信頼関係がある程度構築されており、厳しい対策にも国民は納得しているように感じる。大学教育でも、学生、教員、大学間の日常的な信頼関係が重要だと改めて実感した。

③ 大学と暮らしのオーバーラッピング

岩佐明彦（法政大学）

都心部の大学で、キャンパスに行くことができなくなり、コロナ禍の影響を直接的に受けた。建築学科では模型や図面を介した設計教育があり、オンラインに移行しても学生が不利益を感じないよう試行錯誤を重ねている。図面データのアップロードを通じた教員・学生全員でのデータ共有、コメント機能を用いたやり取り、YouTube での講評配信、動画を用いたプレゼンテーションの導入などを行った。課題の内容も変え、自宅周辺のフィールドワークや、同じプラットフォームを使って受講者全員がリアルタイムで左手での PC 操作を共有するなど、場所を介さないからこそ共有できる情報や気付きに焦点を当てた。現状はコロナ対応によって実空間での学習環境をオンラインに還元することに夢中になっているが、今後オンラインから実空間へ還元できることがあると良いと考えている。また、オンライン化が前提となれば、講義を受けながらフィールドサーベイ

をすることも可能になり、大学キャンパスとフィールドでのオンサイトの学習を再編することもできるように思う。大学と暮らしがオーバーラップしていくような教育のあり方に可能性を感じている。

④ コロナ禍の経験から考える地方小規模大学の課題と今後：教育学の観点から

伊井義人（藤女子大学）

地方の小規模大学で、学習管理システム（LMS）が未整備の中でのコロナ対応を迫られた。2021年4月下旬からLMSの導入が正式に決まり、その後、講義のほとんどをオンラインへ移行し、後期の講義からは対面講義を一部再開している。オンラインへの移行によって、これまでの対面講義で信頼関係に頼ってきた部分のごまかしが効かなくなり、明確な授業デザインが不足していたことに気付くことができた。オンライン講義ではゲストスピーカーを気軽に招くことができるのが利点である一方、気軽さゆえにオンライン・パノプティコンのような状況を生み、コミュニケーション過多が教員・学生の負担につながることもある。また、学生はオンライン講義でも十分な学習ができることを知った。対面がオンラインよりも優れているという先入観は崩れ、今後は対面・オンライン両者の長所を生かした教育が求められるだろう。自身の専門は教育学で、遠隔地を対象にしていた無線を使用した通信教育が、コロナ禍で有効活用され、教育の多様化につながっている事例もあるそうだ。今後、教員はヒューマンリソースが求められる教育活動に焦点を当て、講義のオンデマンド配信の後に個別指導を行うなど、学生指導の質が変わっていくことが考えられる。

3）討論

話題提供者のほか、野村理恵（北海道大学）が加わり、森傑（前掲）をモデレーターに討論が行われた。討論では、以下の4つの話題を中心に意見交換を行った。

① 大学が持つ空間資源、人的資源の役割転換

- ・オンライン学習の充実は、世代や学年といった区分にとらわれず、新しい属性の人々を大学に呼び込み、人生においていつどこで学ぶかという自由度が高まるような期待を抱いた。（野村）
- ・これまで大学での交友関係はキャンパスが担ってきたが、それを地域に委ねていく可能性があるように思う。コロナ禍に伴いゼミの結束は弱まったが、アルバイトなど学生には他のつながりがあることを知ることができた。（岩佐）
- ・個々人の気づきや工夫を、大学全体の対応や変

化につなげることができるか疑問に感じる。（森）

- ・学生や教員は辛抱強く耐えて各々の対応をしているが、コロナ禍を通じてのポジティブな変化を大学組織として現時点で見据えているかは疑わしい。（岡田）
- ・高校でも来年からタブレット授業が導入され、大学の学習環境は「べき論」ではなく、変化する必要に迫られていると認識すべきだろう。（伊井）

② オンライン化による変化と求められる対応

- ・講評会に慣れているのが建築学生の特性であったが、オンライン化に伴い同学年の前でも発表に躊躇する学生が出てきている。（野村）
- ・既に構築された関係があればオンラインでも比較的上手くいくが、関係性を一から構築する場合は難しい印象を持っている。（松永）
- ・対面とオンラインでの学習を両方経験している現在の学部2・3年生に両者の違いや求められる対応を教えてもらうのが良いと感じた。（森）
- ・オンライン試験監督プログラムの導入は、当初プライバシーを懸念する学生から強い反対があり、学科によって対応が異なり、希望者はキャンパスのPCで試験を受けることもできるようだ。（岡田）
- ・オンラインでのやりとりは、教員側の過度な懸念もある。交流会では、教員は場だけ提供して学生に任せると案外上手く対応していた。（岩佐）

③ 非言語コミュニケーションの使われ方の変化

- ・オンラインでのコミュニケーションは、音声クリアになるので言語学習的には助かるものの、会話のタイミングが掴みにくく限界も多い。（松永）
- ・発表を行うと原稿を読み上げるだけの学生が多いものの、しっかり準備をしてきて身振り手振りを巧みに使う学生もいる。（岡田）

④ 反復するコロナ対策の下での継続的な議論の必要性

- ・国際会議や留学では、実地を体験して得られることが多い。ショックドクトリンと同様に、オンライン化を初めとしたニューノーマルの下で、これまで環境が提供してきた価値が奪われてしまう危惧を抱いている。（岩佐）
- ・コロナ禍に移行するとき多くの苦労があったが、コロナ禍を脱する際にも様々な苦労があるように思う。コロナ対策は短期的に緩急を繰り返すのが特徴で、定点観測的な議論の場が設けられると有意義だと感じた。（小松・名古屋大学）

【以上、文中敬称略】